

国際政治における大衆の登場

具島, 兼三郎
九州大学法学部教授

<https://doi.org/10.15017/1356>

出版情報 : 法政研究. 25 (2/4), pp.349-366, 1959-03-05. 九州大学法政学会
バージョン :
権利関係 :

国際政治における大衆の登場

具 島 兼 三 郎

目 次

- 一、は し が き
- 二、王や貴族だけが国際政治の主体として振舞った時代
- 三、国民が、実質的にはブルジョアジーが国際政治の主体として活躍した時代
- 四、大衆が国際政治の主体として新たに登場した時代

一、は し が き

現代国際政治の特徴の一つは、これまで国際政治の上であまり重要な役割を演ずることのできなかつた大衆——労働者、農民、その他の「庶民」、植民地の人民——が重要な役割を演ずるようになった点にあるといえる。歴史が現代にさしかかるまで大衆は国際政治の客体にはなりえても、それが国際政治の主体としてなんらかの役割を演ずることとは、きわめて稀であった。しかるに歴史が現代に入るとともに事態は変わってくる。そこでは大衆は国際政治のただ単なる客体たることをやめ、国際政治の主体として重要な役割を演ずるようになるからである。しかも、その役割の重要性は、日を追うて高まろうとしている。現代国際政治のこうした特徴は、われわれが国際政治の歴史をさかのぼって、それが今日までに辿ってきた足跡をふりかえってみると、一層よくそれを理解することができる。いま国際政治

の主体が誰であったかということを規準にして、国際政治の歴史をふりかえってみると、それが現代の入口にさしかかるまでに、つぎの二つの段階を経ていることがわかる――

一、王や貴族だけが国際政治の主体として振舞った時代

二、国民が、実質的にはブルジョアジーが、国際政治の主体として活躍した時代

これら二つの時代の国際政治は、それぞれ現代のそれとは異った特徴をもっている。したがってわれわれはまずそれらを明かにすることからはじめよう。

一、王や貴族だけが国際政治の主体として振舞った時代

国際政治が国際社会の成立を前提とすることはいうまでもないことであるが、今日われわれが理解するような意味での国際社会が成立したのは、十六世紀以降キリスト教世界の統一が破れて、ヨーロッパの各地に主権国家があらわれるようになってからのことである。しかし、そのころの国際関係は今日のそれとはひじょうに異った特徴をもっていた。そのころの国家は絶対王政またはそれに近い統治構造をもった国家であったが、これらの国家においては、国家と王とは別々のものであると考えられていた。「朕は国家である」というルイ十四世のことばは何よりもよく、この間の事情をあらわしていたが、同じことはドイツ国家を「大僧上と王侯」から成ると考えていたルーテルの思想のなかからも、それを窺いしることができた。絶対王政の国家では、国家は単に王の私領にすぎず、王の利害が国家の利害であり、王権の伸張がそのまま国権の伸張を意味した。そこでは王は地上における神の代表者として無制限の権利をもつものとされていたのに対し、国民はまったく無権利の状態におかれていた。したがってそこでは政治の重要な課題は、王や宮廷の利益のためにいかにして国民から多くを搾りとるかにおかれ、国民の利益を増進することな

ど、少しも眼中におかれなかった。

同じような理由で、このころの国際関係もまた王たちの間の個人的な関係以上のものではなかった。国際関係といふのは一つの国家と他の国家との国民間の関係を意味するのではなく、王家と王家、宮廷と宮廷との関係を意味した。したがって国際政治といっても、それは複數国家間の国民と国民との間におこなわれる政治ではなくて、王家と王家、宮廷と宮廷との間におこなわれる政治を意味した。当時ヨーロッパ諸国の宮廷では一般に「フランス語が用いられ、フロックコート、高帽、競馬、賭事、ホウイスト・クラブなど、イギリス風の趣味が宮廷を支配していた。そして諸国の王や貴族たちは血縁、婚姻等によって往々密接に結びついていた。それ故に、諸国の宮廷は共通の言語、共通の生活様式、血の繋がりをもったところの一つの国際的社交界を形づくっていた。」⁽¹⁾ 当時も外交官の派遣はおこなわれていたが、これらの人々は上記の国際的社交界に出入して、王のために働くのが任務であったから、その資格も亦自らこのような社交界の雰囲気⁽²⁾にふさわしい条件を備えていることが必要とされた。容姿端麗なこと、貴族的教養が豊かであること、酒がたくさん飲めて、しかも酒乱の癖がないこと、女色に惑わされないこと、権謀術数に長けていること、弁説がさわやかなことといったような条件が、すなわちそれであった。外交官の主要な任務は駐在国の宮廷に働きかけて、これを自国の王にとって有利な方向に誘導することや、駐在国の軍備、宮廷内部の力関係、その他の機密を探ってこれを自国の王に通報することにあつた。しかし、そこではまだ駐在国の国民に直接働きかけて、国民の世論を自分の方に都合のいい方向にひっぱってゆくといったようなことは、外交官の任務のなかにはなかった。国民が完全に政治からしめだされ、外交が国民の手のとどかないところでおこなわれていた状態のもとでは、そんなことは無用であったからである。問題は相手の王や宮廷をいかにして抱きこむかというところにあつたから、王家と王家との間の婚姻はしばしば外交の重要な手段となつた。そのころの外交が「閨房外交」(Boudoir Diplomacy)

の名でよばれたのも、そのためであつた。國家間になんらかの條約が結ばれることがあつても、それが守られるかどうかは、國民がそれを支持するかどうかということよりも、王家と王家との血の繋がり、ないしは王たちの騎士道的名譽心の方に、より多くかかっていた。國家間に紛争がおこり、それが外交的手段によつて解決されない場合には戦争がおこつたが、戦争も亦今日のそれとはいちじるしく異つていた。何故ならばそれは一般の國民とは無關係におこなわれたからである。戦争は王たちの軍隊と軍隊との間におこなわれたが、軍隊はどこの國のそれも傭兵制度にもとづいてつくられていた。將校は貴族層の出身者によつて充當されたが、兵士はすべて傭兵であつた。しかも、それは、かならずしも自國民の間からでなく、しばしば外國人の間から傭いいられた。傭兵は給料や死傷した場合の補償金などでひじょうに金がかつたので、むやみやたらに兵士をふやすことはできなかつた。その上これらの兵士たちのモラルはきわめて低かつた。もともと給料目当の兵士達であつたから、給料がわるかつたり、服務条件がきびしすぎたりすると、すぐ脱走した。殊に敗戦の場合など、かれらはわれ先にと脱走した。敗戦のためにたくさんの兵士を殺したり、たくさんの兵士に逃げられたりすると、それは王たちにとって大變な損害であつて、軍隊の再建がなかなか容易でなかつたので、王たちはなるべくなら戦わずして勝つ道をもとめた。また止むなく戦わねばならぬ場合でも、適当な潮時をみつめて和を講じ、なるべく損害を少くするように心掛けた。こんなわけで戦争が国土や國民のすべてをその渦中に捲きこむというようなことは稀であつた。戦場になつた地域はともかくとして、それ以外のところでは國民は戦争のおこなわれたことすら知らなかつた。「無辜の民には自國が戦争していることを気づかせてもいけない」といつたフリードリッヒ大王のことばは、このような環境のなかにおいてのみはじめて理解しうることばにすぎなかつた。戦争が一般の國民と無關係におこなわれたかわりに、講和も亦一般の國民と無關係におこなわれた。王たちは國民にたいしてはなんらの相談もなしに、その領土を、そこに住んでいる住民とともに、やつたり、とつた

りした。そこで国土や国民はまるで王の私有財産のごとく処分された。このことは自らを国家の「第一の召使」とよんだフリードリッヒ大王のような開明的な君主の場合でさえも、かわりなかつた。^(三)

同じことは国家の経済政策についてもいうことができた。そのころの経済政策は後にマーカンチリズムという名でよばれるようになったが、マーカンチリズムの目的も亦国民の福利を増進することではなく、国家の権力、換言すれば王の権力を増強する点にあつた。商業はそれが国民に富をもたらすからでなく、国庫を豊かにし、王の戦力の増強に役立つために奨励された。「マーカンチリズムは、国内では中世的秩序の統一性の基礎に横わっていた経済的割拠主義、地方的市場、諸種の制限規則を打破し、国家を経済の単位にし、商業や製造上の諸問題については国土の全域にわたって国家の不可分の権力を主張した。国外ではそれは富をふやすこと、それ故に又他国との関係において国力を増強することに努めた。富——それはもっとも簡単な形では金銀塊と考えられていた——は、輸出によってもたらされた。この時代に一般におこなわれていた社会に関する静的な考えのなかでは、輸出市場は量的に固定していて、全体として拡大しにくい状態にあつたので、一つの国家にとって市場を拡張し、富をふやす唯一の道は、必要な場合には貿易戦争をおこなって、それを他の国家から奪いとることであつた。こんなわけで戦争はマーカンチリズムの究極の目的となり、政策の手段となつた。」^(三)しかし、戦争はただヨーロッパでおこなわれただけではなかつた。この時代はまたヨーロッパの勢力がアジアやアメリカ大陸など、ヨーロッパ以外の地域にはみだしていつた時代でもあつた。新航路や新大陸の発見は航海技術の発達と相まって、ヨーロッパ人の眼をヨーロッパ以外の地に向けさせ、このころアジアやアメリカ大陸の多くの地域にヨーロッパ人のための植民地が形成された。これら植民地の争奪をめぐってヨーロッパ諸国の間には、激しい斗争がくりかえされ、植民地の人民も亦しばしばこの斗争のそば杖をくったが、それにもかかわらず、これらの斗争の結末はいつの場合にもヨーロッパ諸国の利害関係を中心として決定された。植民地の

人民はヨーロッパ人の斗争の手段として利用されることはあっても、かれら自身が斗争の立役者となることはきわめて稀であつた。

- (一) 岡義武著「国際政治史」三一頁。
- (二) Carr, E. H., *Nationalism and After*, 1945, P. 3.
- (三) Carr, E. H., *op. cit.* P. 5.

三、国民、実質的にはブルジョアジーが、国際政治の主体として活躍した時代

一七八九年フランスに大革命がおこり、ブルジョアジーにひきいられた国民がルイ十六世の絶対王政を打ち倒して、かれら自身の政権を樹立すると、国際政治の歴史の上にも新しい頁が開かれた。フランスと他の国家との関係は、もはやこれまでのように、王家と王家、宮廷と宮廷との関係ではなくなったからである。革命のけっかフランスでは王権が打倒され、すべての権力が国民の手に集中され、国民の意思にもとづいて政治がおこなわれるようになったために、国際社会には一大異変が生じた。それまで王権一色にぬりつぶされていた国際社会の均質性は、これによって打ち破られてしまったからである。それとともに国際政治は一つの新しい段階にはいった。しかし、この新しい段階にもつぎの二つの時期を区別することが必要であつた。

(イ)、第一期　フランス革命から十九世紀の前半にわたる時期である。この時期はフランスに生れた共和制、ないし国民主権の国家が封建的な君主国の包圍攻撃をうけて、悪戦苦斗した点に、その特徴があつた。

(ロ)、第二期　十九世紀の後半から第一次世界大戦に至る時期である。この時期は国民、とくにブルジョアジーが政治の上で無視することのできない存在となり、各地に共和国が出現し、君主国も亦これまでの絶対王政から立憲君

主政に変質し、ブルジョアが国際政治の上で主役を演じた点に特徴があった。

フランス革命は王権にたいする国民の勝利を意味するものであっただけに、ヨーロッパの君主達はこれを対岸の火事として看過することはできなかった。かれらはこれを王権一般の危機として受けとり、烈々たる敵意を燃やした。このことは当時ヨーロッパの宮廷が、同じことばを話し、相互に血縁関係によって結ばれ、臣下の服従を確保するという点で共通の利害関係をもっていたことを考えれば、きわめて当然なことであつた。プロシヤ、オーストリア兩國が軍隊をさし向けてフランス革命の鎮圧にのりだしたのはそのためであつたが、ひとたび戦争がはじまると、それはこれまでの戦争とはいちじるしく性質の異つた戦争となつた。それは王と王との戦争ではなく、王と国民との戦争、換言すれば搾取するものと搾取されるもの、自由を抑圧するものと、抑圧されるものとの戦争となつたからである。いわばそれは国際的規模において戦われた階級斗争であつた。それだけにこの戦争は君主たちにとって勝手のちがつた戦争となつた。まず第一に、フランスにおいて編成された革命軍は、これまでの軍隊とまったく性質を異にする軍隊であつた。王たちの軍隊が給料目当の傭兵から成つていたのにたいし、フランス軍は自由を守るために自らの意思にもとずいて馳せ参じた志願兵から成つていた。そのために二つの軍隊の間には、モラルの点で格段のちがいがあつた。王たちの軍隊では、貴族でなければ将校になれなかつたのにたいし、フランス軍の場合には、貴族であろうとなかろうと、能力さえあれば将校になることができた。すべては能力本位であつたから、それが軍隊の指揮能力を高めたであらうことはいふまでもないことであつた。又王たちの軍隊はひじょうに金のかかる傭兵制度であつたから、よほどの財政的余裕がないかぎり、大兵力をつくりだすことが困難であつたが、フランス軍の場合には国民がその気になりさえすれば、大兵力をつくりだすことはそれほど困難なことではなかつた。現にフランスは一七九八年徴兵制度を採用して、たちまちの中に大兵力をつくりあげた。軍隊のこのような性格のちがいがまた戦術のちがいを生みだし

た。王たちの軍隊では一度大損害を蒙ると、兵力の補充がなかなか容易でなかったので、思いきった作戦ができなかったが、フランス軍の場合には兵力の補充は容易であったから、思いきった作戦に出ることができた。第二にフランスの革命政府は外国にたいして働きかける場合、その国の王や貴族にたいしてでなく、直接国民によびかけた。相手の国民にたいし、フランス革命の諸原則を宣伝し、それらの国民を王権にたいする反抗に駆り立てたことが、すなわちそれであった。さいしょお粗末な装備や戦争に不慣れのためにプロシヤハオーストラリア連合軍に破れていたフランス軍が後にはプロシヤハオーストラリア軍を打破って、かえってこれらの国土奥深く進攻しえたのも、実はフランス軍が多くので王たちの軍隊よりもすぐれていたからであった。このようにしてフランス革命はそれまで国際政治の客体にすぎなかった国民を、国際政治の主体として前面に押し出した。しかし、国民が国際政治の主体としてひろくみとめられるようになるまでには、その後半世紀以上にわたって迂余曲折を経なければならなかった。革命フランスを包む厳しい環境はフランス自身の政局にも幾変転をもたらして、一七九九年にはナポレオンのクーデター、ついで一八〇四年にはナポレオンの皇帝即位といったような事態を生みだして、共和国フランスを君主国に逆転させた。それでもナポレオンの場合には、君主は君主でも人民投票にもとづく君主であって、絶対王政の君主とは異っていた。イー・エツチ・カーはこの間の事情をフリードリッヒ大王と比較しながらつぎのように述べている――

「いまなお本格的君主制の時代に属していたフリードリッヒ大王は、かれの臣下を自分の野望をみたすための手段と考え、母国のことばや文化を軽蔑し、プロシヤを国家のものと考えないで、自分の家族の領地と考えていた。ナポレオンは解放されたフランス国民から選ばれ、委任をうけたものとしてのポーズをとることにより、自分自身を近代民族主義の最高の宣伝家たらしめた。かれはいろんな意味において「民衆的な」独裁者であった。」^(二)

しかし、のちにナポレオンがイギリスとの斗争に敗れ、フランスが反動的なウィーン体制に屈服を余儀なくされて

からは、一時ブルボン王朝の復活という事態さえもおこった。それにもかかわらず、このブルボン王朝でさえもかつての絶対王政そのままの復活ではなかった。何故ならばこの王朝は、ナポレオンを打倒した連合諸国の諒解のもとにフランス革命の原動力であった国民の上層部に参政権をあたえることにより、第二の革命の勃発を阻止しようとしたからである。しかし、フランス革命によって一度点火された自由の焰はその後も消えることなく、一八三〇年にはフランスに七月革命、一八四八年には二月革命がおこり、革命の波はヨーロッパ全体にひろがり、革命、反革命の動乱期を経て、十九世紀の五〇年代の終りになると、各地に抬頭した国民の力の前に、さしも猛威をふるった反革命の特ウィーン体制もついに崩壊の止むなきに至った。それとともに各地に政治の民主化が進行し、かつての絶対王政は立憲君主政への改装をよぎなくされ、共和制は国家の政治形態としてもはや珍らしい形態ではなくなった。

こういう風に政治体制の民主化が進行すると、それにともなつて国際政治の様相も亦変つてきた。絶対王政時代には国家は王個人と同一視され、国土は王の私領にすぎず、王の利害が国家の利害であり、王権の伸張がそのまま国権の伸張を意味したが、こんどは国家には国民の意思というものが新たに加わるようになったから、国家は王個人とは別個のものとなり、国土は王の私領ではなくなり、国家の利害は王の利害から区別されるようになり、王権の伸張はかならずしも国権の伸張を意味しなくなった。王の権力は憲法の制限をうけて、もはや絶対ではなくなり、国民は憲法によってその権利を保証されて、もはや無権利ではなくなった。立憲君主政のもとでは、王はかつての絶対王政時代の王のように、国民にたいし勝手気儘に負担を課し、勝手気儘にそれを使うことができなくなった。又国民を勝手気儘に処罰することもできなくなった。国家の性格がこういう風に変つてくると、国際関係ももはや王たちの個人的関係というわけにはゆかなくなった。国家と国家との関係は、そこに国民の意思が介入するために、王家と王家、宮廷と宮廷との関係とは、性質の異つたものになった。それにともなつて、国際政治の性質もまた変つてきた。

それはもはや王家と王家、宮廷と宮廷との間におこなわれる政治ではなくなり、王や宮廷とは区別された意味での国家間の政治となったからである。国際政治の性質が変わると、また外交の性質も変わった。国民が政治を動かす大きな力となった状態のもとでは、外交もまた宮廷と宮廷の交渉だけでそれをおしすすめることはできなくなった。宮廷間の婚姻はもはや外交の正常な手段ではなくなった。君主が外国の君主と約束したことで、それが政府の承認を得られないときには、取消されることさえあった。このような状態のもとでは、外交官もまた王や宮廷に受けがいないだけで駄目であった。王や宮廷にどんなに受けがよくても、その人が王や宮廷と区別された意味での国家を代表するにふさわしくない場合には、外交官として不適当であるとされた。外交官たるためには、王にたいする忠誠心とは区別された意味での愛国心、換言すれば民族主義的な意識をもっていることが必要とされた。外交官の資格とともに、その任務の上にも変化がおこった。外交官はもはや駐在国の王や宮廷を相手にするだけでは不十分であった。国民が、政治の上で大きな力をもちはじめた状態のもとでは、駐在国の国民に直接働きかけて、これを自国にとって有利な方向にひっぱってゆくことが必要となったからである。この時代になると印刷技術の発達によって新聞が世論の形成に重要な役割を演ずるようになったので、新聞を巧みに操縦することもまた外交官の重要な仕事となった。国の政治が国民によって動かされるようになって、戦争もまた絶対王政時代のそれとはひじょうにその性質を異にするものとなった。かつての戦争は一般の国民とはなんのかわりもなくおこなわれたが、このころの戦争になると、そうはゆかなくなつた。戦争をするかしないかは国民自身の決定にまかされていたし、ひとたび戦争がおこればそれによって国民が大きな惨害をうけることは明かであった。兵制の改革によってかつての傭兵制は徴兵制ないし志願兵制にかわり、軍隊の規模は昔と比較にならぬほど大きなものになっていたし、兵器の発達によって戦争の惨害は戦場だけでなく、銃後にまでおよぶようになったからである。戦争はもはや国民の犠牲なしにはおこない得なくなったので、それをする

か、しないか、又したとしても、それを、何時、どんな条件でやめるかは、王の専断によってではなく、国民自身によって決定されるべきものとされた。

しかし、ここで国民といっても、国民の名において実際に政治を支配し、政治を動かしたのはブルジョアジーであって、大衆でなかった。国民の代表機関は議会であったが、議員選挙のための選挙権や被選挙権には財産上の制限が附されていたし、こうした制限がとり除かれた場合でも選挙制度は一般にブルジョアジーに都合よくつくられていた。そのために議会はブルジョアジーの代表者たちによって支配されるのが常であった。国民が国の実権を握ったところでは、政府は議会の多数党によって構成されるのが常であったから、ブルジョアジーは議会の多数党を通じて政府そのものを支配することができた。このようにして国の外交政策の指導権も亦ブルジョアジーの手に握られた。しかし、一口に国民といっても、ブルジョアジーの階級的利益と労働者や農民のそれとは必ずしも一致しなかった。で、ブルジョアジーが国の外交政策を指導する場合には、それによって国民全体の利益を追究するかのときポーズをとりながら、実は執拗に自分自らの階級的利益を追究した。ときによると労働者や農民その他一般大衆の利益に反するような外交をおこなうことも珍らしくなかったが、そんな場合には大衆からの反撃をおそれて、かれらは事実を隠蔽したり、歪曲したり、捏造したり、外交文書に勝手に手を加えて自分に都合のいいところだけを発表したりした。それでも新聞その他宣伝機関の多くがブルジョアジーによって支配されていた状態のもとでは、かれらは巧みにそれととりつくるって、自分に都合のいい世論をつくりあげることができた。ブルジョアジーは又かれらの階級支配が本質的には労働者や農民の階級的利益と相容れないことをしっていたので、その兵士の大半が労働者や農民の出身者から成っている軍隊にたいし、警戒を怠ることができなかつた。かれらが軍隊を政治に干与させないようにしたのは、そのためであった。兵士たちが階級意識をもって動きだした瞬間に、軍隊はブルジョアジーにとって使えなくなるからで

あった。形式上はブルジョアジーも労働者も農民も国民としての権利においては平等といわれながら、実質的にはそこに打消しがたい不平等があり、国民の名においておこなれる政治も、実はブルジョアジーの階級的利益にもとづく政治にはかならなかつた。本国の労働者や農民の利益さえも考慮されなかつたのであるから、植民地人民の利益が考慮されなかつたことはいうまでもない。十九世紀の末葉から二十世紀のはじめにかけては、いわゆる「帝国主義時代」を現出し、世界の全域にわたって植民地獲得競争のおこなわれた時代であつたが、フランス革命によって掲げられた「自由、平等、博愛」のスローガンも、植民地にまでは及ばなかつた。いなそれどころか、植民地の人民はこの時代に、フランス革命の精神とはおよそ正反対の精神によって取扱われたのであつた。政治の実権がブルジョアジーの手に握られていた世界では、形式上の平等は容易に実質上の不平等に変えられた。ブルジョアジーと労働者は国民として形式上は平等であつたにもかかわらず、実質上は平等でもなかつたように、大国と小国も形式上は主権平等の原則にもとづいて平等とされながら、実質上は平等でもなかつた。大国のブルジョアジーはいろいろな方法を用いて、小国の大国への従属を強いたからである。

しかし、資本主義の発展は社会の階級分化を促進し、一方では労働者階級の政治的成長を促した。労働者階級が政治的に成長してくるとかれらの中の先進的分子は国際的な組織をつくって国際政治への働きかけを試みるようになったが、それにもかかわらず、ロシア革命がおこるまでは労働者階級の国際政治におよぼすえいきょうはきわめて限られたものであつた。

(1) Carr, F. H., op. cit, P, 8.

四、大衆が国際政治の主体として新たに登場した時代

一九一七年ロシアに十月革命がおけると、国際政治の歴史の上にはまた新しい時代がやってきた。ロシアの労働者や農民がブルジョアジーや地主の手から政権を奪って、ソヴェート政権を樹立したことは、それまで他の国々の政権がごとごとくブルジョアジーや地主の手に握られていたために、世界中に一大波紋をまきおこした。ロシアと他の国家との関係はもはやこれまでのように国家権力を握ったブルジョアジーとブルジョアジーとの関係ではなくなり、国家権力を握った労働者階級とブルジョアジーとの関係になったからである。それは一国内の階級関係を国家と国家との関係において再現したものである。このようにしてロシア革命は国際政治の歴史を新しい段階にふみこませたのであるが、いまロシア革命以来今日までの歴史をふりかえってみると、ここでも亦つぎの二つの時期を區別することが重要なように思われる。

第一期 ロシヤ革命から第二次世界大戦まで。

この時期の特徴は、ソ連の労働者階級が資本主義諸国の労働者階級や植民地の人民によびかけ、かれらの支持のもとにその政権を維持し、社会主義の建設をおしすすめた点にある。

第二期 第二次世界大戦以後今日まで。

革命がヨーロッパからアジアに波及し、たくさんの社会主義国家があらわれ、社会主義が一つの世界組織となり、社会主義国相互の間に新しい国際関係が発展しはじめた時期である。

十月革命のけっか、ロシアにつくられたソヴェート政権がそれまで存在した世界のいかなる国の政府ともその性格を異にすることは、革命の直後この政府によって出された「平和の布告」が何よりもよくこれを物語っていた。ソヴェート政府はこの「布告」のなかで、第一次世界大戦をブルジョアジーや地主の利益のために始められた世界再分割のための戦争と規定し、このような戦争を継続することは交戦国の人民や植民地人民の苦悩を増すばかりであるから

即刻やめるべきこと、又やめるに当っては無併合、無賠償の原則によるべきことを主張したのであったが、ここでわれわれが注目する必要があるのは、ソヴェート政府がその主張を実行に移すに当って、ツアー政府時代の秘密条約を公表し、その無効を宣言したことであつた。「平和の布告」はのべている――

「政府（ソヴェート政府）は秘密外交を廃止するとともに、すべての交渉を全国民の面前で完全に公然とおこなう確固たる意向があることを表明し、一九一七年二月から十月二十五日までに地主と資本家の政府が確認または締結したすべての秘密条約を全部公表することにただちに着手する。これらの秘密条約の全内容は、大多数の場合そうであつたのだが、ロシアの地主と資本家に利益と特権をあたえるものであり、大ロシア人の併合地を引きとめ、または増加するためのものであるかぎり、政府はこれが無条件に即時無効であることを声明する。」^(二)

これによってソヴェート政府はこれまで帝政ロシアのために半植民地的状態に追いつまれている隣接諸国（トルコ、イラン、アフガニスタン、中国など）を不平等条約から解放し、これらの国々の人民の間に多くの支持者を獲得したのであつた。「平和の布告」は又交戦諸国の労働者たちにたいして、つぎのように呼びかけた――

「ロシアの労農臨時政府は、すべての交戦国の政府と国民にこの講和提案をするとともに、とくに、人類のもつとも先進的な三つの民族、この戦争に参加した三大国、イギリス、フランス、ドイツの自覚した労働者諸君にも呼びかける。これらの国の労働者は進歩と社会主義の大業に最大の貢献をした。イギリスにおけるチャーチスト運動の偉大な手本、フランスのプロレタリアートがおこなつた世界史的意義をもつた一連の革命がそうであり、最後に、ドイツでは社会主義者取締法にたいする英雄的なたたかい、ドイツの大衆的なプロレタリア組織をつくりだす

という、全世界の労働者の手本になる、長期にわたる頑強な規律ある活動がそうである。プロレタリア的英雄的行動として歴史的創造活動のこれらすべての手本は、われわれにとってつぎのことの保障となるものである。すなわち、上記の国々の労働者は、戦争の恐怖とその結果から人類を解放するという、いまかれらに課せられている任務を理解し、そしてその全面的な、断乎たる、献身的な精力的活動によって、われわれが平和の大業を、それとともに勤労被搾取住民大衆をあらゆる隷属とあらゆる搾取から解放するという大業を、成功裏に最後まで遂行するのをたすけるのである。^(二)」

これをもってみれば、ソヴェート政府がどのような社会的勢力に依存して、その政策を執行しようとしているかは、あまりにも明かであつた。それはブルジョアジーがこれまで搾取の対象としてきた植民地の人民、後進諸民族、労働者階級、農民によびかけ、その勢力を糾合しようとするものであつたから、世界中のブルジョアジーからかれらの支配と脅すものとして受けとられ、ひじょうな敵意をもって迎えられたのは当然のことであつた。ブルジョアジーの敵意はやがてロシア革命にたいする国際的な武力干渉となつてあらわれたが、この干渉は革命化したロシア人民の強力な抵抗にあつて、ついに失敗に帰した。ロシアの革命軍は装備こそ干渉軍に比してお粗末であつたが、モラルの点では干渉軍よりもはるかにすぐれていた。干渉軍はいづれも政治に干渉することを禁ぜられ、自分がなんのために戦っているのかわからない兵士たちから成っていたのにたいし、革命軍は政治教育を施され、自分が何のために戦っているかをよく弁えた階級意識に燃えた兵士たちから成っていたからである。その上ロシアの革命軍はソヴェート政府の呼びかけに答えた世界中の革命的労働者や被圧迫諸民族、植民地人民の支持をうけることができた。このようにしてソ

ヴェート政府の地位は確固不動のものとなった。それとともにこれまで国際政治の舞台の上では滅多に重要な役割を果たえられなかった労働者や農民、植民地の人民が国際政治の舞台の上に躍り出るチャンスにあたえられた。それとともに世界中のブルジョア政府にとっては油断のならぬ事態がおこった。ブルジョア政府が国際政治の分野で国民的利益の名にかくれて、ブルジョアの階級的利益を追及しようとする、つぎの瞬間にはソヴェート政府によってその仮面をひきはがれ、自国の大衆にその正体を曝露されてしまうからであった。こんなわけでソヴェート政府の活動が活潑になるにつれて、ブルジョアの世論操作は段々に困難になってきた。第一次世界大戦は世界再分割のための戦争であったにもかかわらず、敗戦国の領土や植民地を公然と分割すると非難されるおそれがあったので、連合国のブルジョアは「委任統治制度」といったようなゴマ化しの手段を考えださねばならなかった。又ソヴェート政府がトルコやイランにおける帝政ロシアの權益を自ら放棄したけっかは、資本主義諸国も亦これらの国々との不平等条約を廃棄せざるをえなくなった。こういう風にソヴェート政権の出現は、いろいろな形で国際政治の上にいきょうを与えはじめた。しかし、いきょうを与えたといっても、革命がロシア一国にとどまっていた間は、それにも自ら限界があった。

ところが第二次世界大戦後になると、事態はさらに変わってきた。革命は東ヨーロッパやアジアにひろがり、社会主義をめざす国々がたくさんあらわれたことによって、国際政治にたいする労働者や農民の發言権がさらに一段と強くなったからである。いまでは社会主義は一国の組織ではなく、世界的な組織となった。そして社会主義国相互の間には、これまでの国際関係にみられなかった新しい型の国際関係が発展しようとしている。プロレタリア国際主義にも

とづく国際関係がすなわちそれである。それは資本主義国間の関係が資本それ自身のもっている性格を反映して、優劣敗、弱肉強食の関係にあるのに反して、無私的な相互援助によって社会主義の実現を期そうとするものであって、資本主義的な国際関係にくらべてはるかに安定性をもった国際関係である。このような関係のなかにある社会主義諸国の経済建設のテンポは、資本主義諸国のそれよりもはるかに早いので、今では世界工業生産高の四〇%が、社会主義世界によって占められている。このような経済力の上昇は必然的に国際政治にたいする労働者階級の発言権を強めずにはおかない。

加うるに第二次世界大戦後になると、植民地人民の発言権も亦いちじるしく強くなった。この戦争のけっか植民地の統治機構がめっちゃめっちゃに破壊され、植民地領有国の力が弱ったために、各地に植民地人民の独立運動がおこり、今までは戦前の植民地や半植民地の総面積九一九〇平方キロのうち二七九八万平方キロ、すなわちその約三分の一、その総人口十五億のうち十三億、すなわちその約五分の四が帝国主義の支配から或いは脱し、あるいは脱しようとしている。それとともに新に解放されて国際政治の舞台に登場してきた植民地人民の声を無視することができなくなつた。しかし、無視することができなくなったのは植民地人民の声だけではない。原子兵器の発達は、地球上に住む人間の一人一人の運命にまで決定的なえいきょうをもたらすことが明かになったので、今では何でもない普通の人々までもが、戦争か平和かという問題に益々介入せざるをえなくなっている。そして原子戦争に反対し、原子兵器の実験禁止をさげぶこの「庶民」の声は、国際政治の上で無視することのできない要因になりつつある。

大衆はこのようにして今日国際政治の重要な主体となったといえることができる。

論 說

- (一) レーニン全集第二十六卷（大月書店版）二五〇―二五一頁。
- (二) 同上、二五一―二五二頁。